

「功德」という語について

桜 部 建

一

「功德」は、数ある漢訳仏教語の中で、経論釈の中にずいぶん頻出するし、国語に入って現代の日常会話にも時には用いられる、ポピュラーな語の一つである。

ところで、「功德」をその訳語とする原語として、ふつうまず考えられるのは *guna* である。手近いところ、例えば望月・仏教大辞典も仏教大辞彙も宇井・仏教辞典も *guna* を「功德」の原語としている。一方、われわれは *puṇya* の語もしばしば「功德」と訳されていることを知っている。例えば、『妙法蓮華経』の諸品の標題の中で「分別功德品」「随喜功德品」などある、その「功德」はまさしく *puṇya* である。荻原・梵和大辞典では *guna* の項にも

puṇya の項にもその漢訳語の一つとして「功德」が共通に挙げられている。中村・仏教語大辞典では「功德」の項に、その原語としてまず *guna* が、次に *puṇya* が挙げられている（なお続いてそれ以外の語も挙げてあるが、その中の一つについてはのちに触れる）。

guna はしばしば単に「徳」と訳され、基本的には *quality*, 特に *good quality*, *excellence* を意味する。*puṇya* はむしろしばしば「福」と訳われ、*good*, *meritorious*; *merit*, *meritorious action* を意味する。両者ともとより本来全く別個な語であるが、それが、仏典の中で、あい通ずる意味をもって用いられる（すなわち *guna* が *puṇya* に近い意味 (*a good quality*, *virtue*, そしてやがて *merit*) に用いられる）場合は多くて（事実、「功德」の原

語を *guṇa* と見ているとして先に挙げた三辞典がその語義として説くところはむしろ *puṇya* の義そのものである、それがすなわちいま両語共通に「功德」と漢訳されるゆえんである、と考えるべきであろうが、しかし、また、たまたま同じ漢語「功德」をもって訳出されていても原語の相違を考えて理解し分けなくてはならない場合もあるのでなかろうか。あるいは、甲の漢訳者は *guṇa* を「功德」と訳し、乙の漢訳者は *puṇya* を「功德」と訳して、それぞれ同じ訳語の上に別個の意味を托している、ということはないであろうか。いったい *puṇya* と *guṇa* とは仏典の中で、相互に、あるいはそれぞれに、どのような用いられ方をしているのであろうか。それが、また、どのような意味でそれぞれに「功德」と訳されたのであろうか。

二

バーリ語の *puṇṇa* と *guṇa* との用例の検討から始めよう。

puṇṇa は *pāpa* あるが *a-puṇṇa* を反意語として、ひろく初期バーリ諸仏典にわたって頻出する。「およそ三界の善行なるもの」が *puṇṇa* であり (*puṇṇam vuccatī yam kiñci tedhātukam kusalaḥṣaṇkhārāṇi, Mahā Nid. 90*)、すな

わち有漏の善業である。それが有情の「相続を浄め (*saṅtanam punatī, visodheti, Vva 19*)」て善趣、天界、に生ぜしめるという *merit* をもたらす。すなわち善なる行為とその *merit* を含めた意味で、あるいは特にその *merit* の方に重点をおいて、この *puṇṇa* の語は用いられるのである。*puṇṇa* を「作る *karoti*」あるいは「もたらす *pasavati*」最も主要な行為は布施であるが、また、施・戒・修習が三「福業事 *puṇṇa-kiriyā-vatthu*」と呼ばれる。布施して最大の *puṇṇa* を生ずるころの「福田 *puṇṇa-khetta*」はすなわち僧伽である。

右のような *puṇṇa* の語のひろい頻繁な用例に比べて、*guṇa* の語が初期バーリ仏典に見える場合は限られる。それが「徳」「徳性」を意味して用いられる例は、律蔵や四ニカーヤやクッダカ・ニカーヤの中の成立の早いと見られているテキストだけについていえば、減多に見当らないといつてよい。搜索し得た少数な用例はすべて韻文の中に現われる。そこでは *guṇa* は、あるときは布施・利行・愛語 (*piya-vadati = peyya-vāca*)・同事 (*samāna-chandata = samānattatā*) の四摂事を行することにおいて得べき徳性を意味し (*D iii 153, 154*)、あるときは相好業を積みつつある菩薩の具えもつ徳性を意味する (*D iii 170*)。また、

guṇavat の形が時に silavat, yasavat と並べて用いられ (Thig 446)* 時に guṇa-hina と対して用いられ (Thag 955, 956) ところが、その場合の guṇa も尊ぶべきであるいは敬すべき人に具わった徳性を意味する。

これら guṇa が「功德」という訳語を与えられるべき場合とは異り、(1)それが数詞に伴って「……倍の」「…重の」の意を表わす例 (e. g. saṃghātam catuṣṣunam paññāpetvā, S ii 221) や、(2) same guṇe が「適度に」「中正に」の意で使われる例 (V i 182, A iii 375) や、(3) tapo-guṇa (M ii 36), lobha-guṇa (Sn 663) などの場合のように guṇa がただ多数あるいは多様なものを表わすために用いられる例 (Guṇo ti middiṭṭhāraṇaṃ anekakkhattun paṭattā vā, Sn Comm. p. 478, すなわち lobhaguṇo = tanhāya) は、韻文・散文の諸テキストにわたってかれこれ散見される。かなりしばしば見出される合成語 pañca-kāma-guṇa (「五欲徳」「五欲功德」) もこれらの例の一と見るべきであろう。

ところでクッダカ・ニカーヤの中で成立がやや遅いと考えられているアパダーナ、ブッダ・ヴァンサ、チュラ・ニッデーサなどのテキストになると、guṇa の語を「徳」「徳性」の意味に用いた例がかなり多くなっており、殊にアパダーナではずいぶんそれが目立つ。やはり仏陀に関しての用例

が多く、例えば、仏は「その徳に限りがない」(amita-guṇo, Ap p. 519)* 「徳の香い飾られた」(guṇa-gandha-vibhūṣito, p. 508)* 「あらゆる徳の鉱脈」(guṇānam ākaro, p. 508) であり、「徳を積み重ねた指導者」(nāyako guṇa-saṅcayo, p. 465) であり、「徳の香をもつて薫る」(guṇa-gandhena pavāyati, p. 356)*。弟子はあらゆる徳を挙げて仏を称讃し (p. 460—61)* 仏とその説法の中によつて弟子の徳を説き (p. 468)* 徳を称讃する (p. 475, 496)*。人は渡り難い急流を「仏の徳を念じて」(guṇam saritva buddhassa) 越え渡る (p. 469)* という。仏の徳として挙げられるのはあるいは「漏滅尽し、いかり無く、疑いを断ち……」「自己が」制御されており「他を」制御するものであり、「みずから」静かであり「他を」静かならしめ……勇者であり賢者であり、智慧あり慈悲あり……心平等にして偏頗なく……すべての言説を越える」等々 (p. 460—61) であり、あるいは「ことばの輝きをもって所化」「有情」の蓮華を目覚めしめ、理智の光をもって煩惱の泥を乾かす」(p. 468) ことであり、あるいは「虚空を歩み、雨雲のごとく降りそそぎ、火のごとく輝き、体を現わしてはまた消し、一「身」が多となりまた一となる」(p. 305) といった神変の力である。

仏弟子についても、いろいろに *guṇa* が語られているが、注意を引くのは、布施 (*dāna*) の果 (*phala*) として受ける種々の「利益」(*ānisaṃsa*, この語は中村・仏教語大辞典に「功德」の原語の一として挙げられる) を、「徳」(*guṇa*) の語で言い替えていることである。例えば、飲食を布施したことによって享受する「十の利益」とは「寿あり (*jyuvat*)、力あり (*bālavat*)、勇あり (*vīra*)、容色あり (*vaṇṇavat*)、名声あり (*yasavat*)、安樂であり (*sukhin*)、食物を得ており (*lābhī annassa*)、飲物を得ており (*lābhī pānassa*)、雄々しく (*sūra*)、智力を具えている (*paññānavat*)」といったこれらの徳である、という (p. 316)。燈明皿を布施して「三つの利益」を享受するとは、「生まれがよく (*jātimat*)、身体の諸器官が完全に (*āṅgasampanna*)、智慧が具わっている (*paññāvat*)」と、いふことな「諸徳をその等流として (*nissandato*) 得る」ことである、という (p. 313)。施の果として徳を得るというのであるから、その「徳」は「福」(*puṇṇa*) とあわせて近きものとなる。

三

術語を厳密に使用し、すべてに分析的な傾向の強いアビダルマ論書では、*puṇya* と *guṇa* の両語は、もとより、は

っきり別個な意味に使用される。たとえば『俱舍論』の両漢訳はともに、*puṇya* を主として「福」「福德」と、*guṇa* を主として「功德」「徳」と訳し分けている。そこでは *puṇya* は有漏の善業一般でなく特に「欲界における善業」(*Pradhāna* ed. p. 227) に限定して解されている (玄奘訳では「説欲界善業名為福、招可愛果益有情故 (一五・二二b)」という) が、主として考えられているのはやはり施 (*dāna*) によるそれであり、支提に施して生ずる *puṇya* が論ぜられ (p. 272) たり、三十二相の一一は百の *puṇya* より生ずると説かれ (p. 266) たり、衣食房舎座臥具などを施す、有依の「福業事」(*puṇyakriyā-vastu*) と歡喜し礼拝し供養するなどの、無依の「福業事」とが説かれ (p. 196) たりする。

guṇa は *dosa* に対する (p. 266, 355) *dosa* が所対治の障であるのに対して *guṇa* は能対治の道である (玄奘訳二・三・一六a)。あるいはまた「智所成の徳」(*jñānamaya guṇāḥ*, p. 432) として十力・四無畏・三念住・大悲の十八不共仏法や無諍・願智・四無礙解・六通等の凡・聖に通ずる諸徳目が説かれ (pp. 411—431)。あるいは「すべての徳」は静慮に「依止する」と説かれ (p. 432)、あるいは信・戒・聞などのいわゆる七聖財が「徳」として説かれ (p.

269)、あるいは「不浄〔観〕・持息念・〔四〕念処・〔四〕無量・〔八〕解脱など」が「有漏の徳 (sāsrava guṇāḥ)」と説かれる (p. 410)。puṇya-kṣetra (福田) に対して guṇa-kṣetra (玄奘訳「徳田 (一八・三九)」) 功德田 (二五・一七 a、一八 a b) という用語もあって相似を思わせるようだけれども、アビダルマ論書において puṇya と guṇa とははっきり別な語であって、それがあい通ずる意味に用いられることはないとしてよい。これは南伝のアビダルマについても同様である。

四

文学的性格の強い大乘經典において、術語の使用に論書のような厳格な簡別が見られないのは当然である。したがって、漢訳仏典の中で、訳語「功德」が原語 puṇya, guṇa, その他の上に通用されているような例が、そういう經典の訳の場合に多く見出されるのも自然なことである。いまは鳩摩羅什の訳に係る手近かな二、三の經の上でそれを検して見よう。

『金剛般若經』の中に guṇa の語は、guṇa-vat の形で、śīla-vat, prajñā-vat と並挙されて (すなわち上掲の Thig 446 の場合と似た使い方で)、ただ一度だけ現われる (Conze ed.

p. 31)。什訳でその guṇa に当る語は「福」である。また、puṇya の語は多く puṇya-skandha の形で十余回現われる。什訳ではそれを「福德」(p. 30, 31, 33, 37, 52, 55)、「福」(「福勝」p. 33, 「得福」p. 36, 「福甚多」p. 39, 「福」あるいは「功德」(p. 43, 44, 45) としている。別に、āścarya の語が一度「希有功德」と訳されている (p. 39)。

小さい方の Sūkhāvatīyūha に puṇya の語は一度も見えないようである。ところが什訳『阿弥陀經』には「功德」という訳語が十四回も現われる。その中、九回は「不可思議功德」という形で見え、その八つまでが梵文の中の acintya-guṇa にあちしく相当する (一つだけは梵文にその対応語が見出せない)。また四回は「功德莊嚴」という形で見え、すべて梵文の中の guṇa-vyūha に相当する。あとの一回は「八功德水」であるが、それは梵文では aṣṭaṅga-peṭavāri に当たる。別に、「福德」という語が一度だけ (「不可以少善根福德因縁得生彼国」) 見えるが、その「善根福德因縁」に当るものは梵文では kuśala-mūla という語しかない。この經典で「功德」と訳されている語はすべて、仏・聖者・その他の人の徳、徳性、を意味するのではなく、阿弥陀仏の仏国が具えもつところのすぐれた特質を意味して用いられている。

『妙法蓮華經』の場合、訳語「功德」はたいへん自由に使われているように思われる。そこには、「功德」「徳」と訳されているのが *Saddharmapuṇḍarīka* の *puṇya* に相当する例(化城喻品第二七偈、法師品第二三偈、安樂行品第三八偈など)、「功德」と訳されているのが同じく *guṇa* に相当する例(Kern-Nanjio ed. p. 121, 五百弟子受記品第二〇偈、など)と同じく *ānuśāṇa* (P. *ānisaṇsa*, 上述4ページ上段参照)に相当する例(安樂行品第七三偈、法師功德品標題、など)、「功德」「徳」と訳されているのが梵文では *kuśalamūla* に相当する例(p. 66 「徳本」, p. 268)などが混在している。また、梵文の中の *puṇya* の語に相当するものが什訳で「福」となれ(方便品第一一〇偈、化城喻品第一七偈、第三四偈など)、あるいは「福德」などとされ(方便品第六四偈、第七七偈)ている例もあり、*śīla* が「徳」と訳されている(序品第八三偈)などの例もある。(なお、什訳が「功德」「徳」などとしていながら、梵文のテキストの中にそれに相應するような語を確認しがたい、あるいは全く見出しがたい場合が十回ばかりある。)

比べて考え合わせて見るために、康僧鑑訳(とされている)『無量寿經』の場合を検すると、ここでは「功德」という訳語が四十回ほども現われる。その半数までは、大き

い方の *Sukhāvātya-vyūha* の中に対応部分が存在しないような箇処にあるか、あるいは対応部分は存在してもそこにそれに相当する語を見出せなかったりそれと確認できなかったりするものであって、つまりそれがいかなる語の訳語であるかは推測しがたい。残りの二十回の中、*puṇya* の訳語であろうと考えられるものは二回(「功德、善力住行業之地」(Ashikaga ed. p. 34)、「諸妙音声神通功德」(p. 37)、*guṇa* の訳語であろうと考えられるものは三回(「功德、持慧」(p. 6)、「威神功德不可思議」(p. 42)、「具足成就無量功德」(p. 51))あり、*guṇa* の訳語らしいが多少疑問のあるものが三回(「聞其光明威神功德」(p. 28)、「所共嘆譽稱其功德」(p. 28)、「成就如是無量功德」(p. 54))ある。ほかに、*kuśalamūla* の訳語であるとしたか考えられないものが九回(「修諸功德、願生彼国」(p. 42)、「修行功德、願生彼国」(p. 42)、「雖不能行作沙門大修功德」(p. 42)、「乃至少功德者不能知見」(p. 16)、「以疑惑心修諸功德」(p. 58)、「不知菩薩法式不得修習功德」(p. 58)、「亦得偏至無量無數諸余仏所修諸功德」(p. 60)、「諸小行菩薩及修習少功德者」(p. 61)、「以弘誓功德而自莊嚴」(p. 66))、おそらく *kuśalamūla* の訳ではないかと思われるものが一回(「作諸功德信心廻向」(p. 58))、*kuśaladharmā*, *kuśala* の訳語かと考えられるもの

が各一回(「令諸衆生功德成就」(p. 24)、「如是功德不可稱說」(p. 25))見出される。なお「積功累徳」とあるのが *kuśalamūlāni samudānīyān* の訳と見られる箇所もある(p. 25)。

puṇya が「善本」と訳されているらしい箇所が一つ(「若人無善本不得聞此經」(p. 64)、『*kuśalamūla*』が「徳本」と訳されているらしい箇所が三つ(「植諸徳本至心廻向」(p. 14)、『在諸仏前現其徳本』(p. 15)、『修菩薩行具足徳本』(p. 20))ある。大 *Sukhāvatīvyūha* の方に *guṇa* や *puṇya* の語が見え、『無量寿經』の方にそれに相当すると見られる訳語を捕捉できない場合は少くないが、その中で『阿弥陀經』の場合と対比して特に注意を引かれるのは、大 *Sukhāvatīvyūha* の初めの方に繰り返えされている *buddhaśeṭṭha-guṇavyūhālaṅkārasamipad* あるいはそれに極めてよく似たフレーズ(p. 9, 10, 19 などに九回はとも見出される)が、『無量寿經』ではいずれも単に「莊嚴仏土」あるいは「嚴淨仏土」などという形でしか見られないことである。また『無量寿經』に「福」「福德」「福田」などの訳語を見ることは二十回に余るが、そのほとんどが大 *Sukhāvatīvyūha*

に対応部分の存しない箇所へ属し、わずかに二例のみが対応部分の存する箇所に見られるけれども、そこにも *puṇya* その他の語がその相当語として見出されはしない、ということも注目すべきことと思われる。

五

右によってわれわれは、鳩摩羅什の用いた訳語「功德」が、ただ一つの原語に基づいているのではなくて、*puṇya*, *guṇa*, *kuśalamūla* などいくつもの語の意味のからみ合うところにその語の用法があるらしいことを知る。また、そのようなことが鳩摩羅什(およびその訳業に協力した人々)の不注意や原語義理解の曖昧さに帰せらるべきでないことを、『無量寿經』の同じ訳語の上にもそれとパラレルなものが見出されることによって、知らしめられる。そして、また、しばしば「善本徳本」「功德善根」などというような言い方がなされるのにもその理由がある、と考えられるように思う。なおひろく諸仏典に亘って精査し、考察して見なければならぬ。